

平成26年5月25日

老球の細道⑮

大会を前に、コーチ及びプレイヤーの心構え

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

バスケットボールの師と仰ぐ人物が私には何人かいる。その中の一人が新井春生先生である。すでに日本バスケットボール界から引退し、今は愛知県の自宅で彫刻をしながら余生を送っている。かつて、短大のコーチでインカレ（全日本学生選手権大会）を制覇し、ナショナルチームの監督も務めた名将である。先生の教え子には全日本選手も数名おり、かつて世界選手権準優勝の立役者になった選手もいた。

平成の初めに会津バスケットボール協会は新井先生を3回招聘して講習会を開催している。会津の華麗（加齢）なる人たちは直接ご指導をしていただいたことを覚えているだろう。ドリブルとポストプレーの指導においては当時日本一であった。また先生はバスケットボールの名コーチであるばかりでなく、書道、彫刻にも非凡さを持ち、多芸多才で、人間の器も計り知れないほどの怪物であった。

先生からいただいた著書『高き理想を求めて』の中に、バスケットボールのみならず、生き方に関する名言がたくさんある。これらの言葉は、私が現役選手だった頃バスケットボールの雑誌に毎月のように掲載されていた。先生の信者であった私は、ノートに書いたり、部屋の壁に貼ったりして常に目に入るようにして、自分自身を叱咤激励していたことを思い出す。

高校生の県大会がもうすぐ会津で開催される。中体連も真近。ミニバスの大会も刻々と近づいている。本番の大切なゲームの前に、実績に裏打ちされた琴線に触れる名言で足を固めたいものである。

■目標のレベルがチームのレベルである

県代表で甘んじているチーム、選手は、全国大会でも上位入賞は望めない。コーチ、プレイヤーの目的意識の強烈さがレベルアップにつながる。

■熱心なことは最低レベルである

毎日目標に向かって汗を流している者であれば不熱心な者はいないはずだ。熱心は最低レベル（県代表）どまりである。見ていられないほどの練習であれば全国優勝をする。生命の危険を感じるほどの練習であれば日本代表のレベルである。

■2時間の全体練習では、ボールに触れる時間は変わらない。個人技の上達には、フリー練習しかない。

フリー練習（個人練習）は長時間できるものでもない。本練習の前後に30分間の練習で十分である。1日24時間の中で、フリー練習の時間を作る工夫をすべきである。

■コートに急ぐ足どりで、その日の練習密度がわかる

毎日の練習に目標を持つことが、体育館への急ぐ足どりとなる。

■コーチの指示に100%であれ、99%では勝つことができない

コーチの考え方に100%に近い反応を選手が示すことにより、コーチはさらに燃える。プレイヤーとコーチの信頼関係が自信につながる。

■人は試練に耐えた強さだけ成長する

スポーツには勝敗はつきもの。勝つときも負けるときもある。追いつめられて、どうし

ようもなくなった時に、自暴自棄にならず冷静にこれからのことを判断し、その難関を幾度も乗り越えるファイトこそ、その人間をさらにたくましく成長させる。

■有言実行は勇気がいる。できなければ信頼を失う

心の中でいくら考えていても、前進はしない。皆の前で発言し、PRをしたならば、やるしかない。大変な勇気がいる。自分に対して背水の陣を敷く。できなければ信頼を失うからがんばるしかない。

■言い訳は努力不足の表現で、それ以上は進歩しない

言い訳をする前に、どのように解決すれば良いかの創意工夫をまず考えなければならぬ。「今に見ろ」この次は、絶対に勝ってみせる。このファイトと努力しか問題は解決しない。

■栄光への道は限りなく遠い。しかし、今日の一步で近くなる

毎日が勝つための努力で、その日のために、全国のチームが汗を流している。なかなか勝てなくて、追いつめられた状態になり、自信を失うこともしばしばである。勝つことがいかに困難で大変なことであるか、皆がいやと言うほどわかっている。特に日本一になるとすれば、すべての行動や考え方が日本一にならねば目的を果たすことはできない。

毎日の懸命な練習の積み重ねにより、1ミリずつでも前進して栄光への夢が可能になると信じている。決して自信を失い、悩むことなく、「ピンチはチャンス」試練に耐え、たくましく歩み続けなければならない。